

第 6 回京都市未来共創チーム会議 グループ討議 議事録

A チーム グループ討議

安野 貴博 委員
大井 葉月 委員
仲田 匡志 委員
三川 夏代 委員

大井委員

序文を読んだ感想は、率直に難しかった。例えば、「回復」と同じ意味なのに「恢復」という漢字をあえて用いたのはなぜだろうと気になった。

歴史と文化に関する部分は、未来共創チームにおいて出てきた、参照点が数多くあるという部分にもつながると思うが、同じ部分に書かれている「幸運にも」という語句を用いることには良し悪しがあると思う。京都のこれまでの歴史があるから、戦禍を免れてきたと考える人もいるのではないかな。細かい部分ではあるが、様々な方が読むことを考えると気になった。

他の委員の考えを聞きながら、自分の考えをブラッシュアップしていきたい。

三川委員

私も「恢復」という漢字が気になった。何か意図があるとは思いますが、序文の後半を読んでもわからなかった。

仲田委員

私は、全文を英訳するとどうなるのか考えてみた。回復を直訳すると「Recovery」になるが、異なる漢字を使うところに京都の余白があるという解釈もできるのではないだろうか。

実際、地域企業をコミュニティ・ベースド・カンパニーという言葉に変換しながら、実は京都がその言葉の発祥であるという直近の歴史があるように、この序文が英訳されても京都だとわかるかどうか重要であると思う。おそらく、恢復の英訳は「Recovery」ではない。日本語から別の言語に翻訳した際に、京都だとわかる遊びがあってもよいのではないかな。

安野委員

野村特別委員の意図を考えると、引っかかる部分を作ったのではないだろうか。京都における人間性の恢復は単なる回復ではないことを表しており、京都でなければできない恢復の方向性や固有のものであることを強調したいのかもしれない。

三川委員

私は、「過去に生かされ、未来を生きている」の段落はワクワクしながら読んでいた。具

体的には、有名な何者かにならなくてもよいということと、そんな自分たちでも先人たちの営為の結晶を未来に伝え遺しても良いと書かれているところや、しなければならぬではなく、しても良いというメッセージ性にワクワクした。さらに、何を遺していきたいのかと問いかけられていると感じるのも良いと思う。

安野委員

全体的な内容については、良い話をしているという印象を受けた。過去に対する感謝と、継承していかなければならない覚悟の両方が込められており、「京都市民は努力を重ねていく」という言い方も良いと思った。

一方、「人間は、自然に生かされ、自然を生きている」という部分はイメージしづらかった。「過去に生かされ、未来を生きている」という部分はカッコいい感じもするし、納得感もある。自然に生かされていることもイメージできるが、「自然を生きている」という表現が個人的には腑に落ちなかった。

仲田委員

直観的ではあるが、安野委員のおっしゃることは理解できる。大きな視点で捉えたと自然に生かされているが、都会に住んでいると自然を身近に感じづらく、その感覚を持ちづらいということはある。そこに違和感を持つということが重要なのかかもしれない。

安野委員

「自然に生きている」という表現であれば理解できるが、そうすると他の段落との対比がなくなり、文学的な美しさが減ってしまう。

仲田委員

序文に書かれている自然を英訳するとどうなるのか。「Nature」なのか、「Earth」なのかという議論ができると面白いのではないかな。

三川委員

京都の街を歩いている時に、ふと自然の中にいるなと感じる瞬間がある。例えば鴨川にいる時に、気づいたらあそこの空気の中に自分が生きている感覚を持つ。

大井委員

自然に対するユニークな感性を序文で表現したかったのかかもしれない。

仲田委員

私は、読み言葉にした時のことを考えてみた。序文にも書かれている「不断の努力」という言葉は好きだが、読み方によっては「普段の努力」に聞こえてしまうと思った。そうなるとう序文の使われ方も大事になってくる。とはいえ、書き言葉で読み物として使われることが

多いと思うので、わかりやすい言葉と普段あまり使わない言葉を受け手がどのように解釈するのか考えてみたいと思った。「恢復」という字を使うことで、今失っているものは何かと考えたり、「不断の努力」とは、何を努力し続けていくことなのかと考えたりするきっかけとなるものとして序文を捉えることができるのではないかと。理解しやすい言葉もたくさんあるので、わかりやすさとわかりにくさのバランスを見るのも面白い。

答え合わせができないことはもったいないことなのか、答え合わせしなくて良いものなのか。最終的に序文が世の中に出た時の感触を若い世代の視点で見ることも面白そうだった。そういった意味では、大井委員の率直な感想や、序文を読んで感じる違和感はそれ自体が大切なことなのかもしれない。序文に書いていることがすべてということではなく、ここから何かが始まっていくような感じである。未来のビジョンでもありつつ、未来のための現在の問いかけという側面もあるのではないかと。一般的にビジョンというのは、正解とされた、完成された未来を示すものだが、「過去に生かされ、未来を生きている」とあるように、序文は完成した瞬間から過去のものになり、過去の序文に出てきた問いのおかげで未来をつくることができるという感覚になる。序文を読んだ時に感じる違和感の中でも、そこから問いが生まれるような良質な違和感もあれば、ただ単にわからないというものもあると思うので、精査は必要である。

三川委員

共同体の段落に使われている「共栄」という言葉には何が含まれるのか気になった。読み解くと人間同士の共栄かと思われるが、共創チーム会議の議論では、人間だけでなく、自然や微生物などマルチスピーシーズを主語にした価値観が出てきたので、それがどこまで反映されているのか疑問に思った。その観点は自然の段落に包含されているのかもしれないが、「共栄」を未来の視点で考えると人間以外も含まれると思うので、その文脈も入ってくると良いのではないだろうか。

「0. 1 市民」というワードが以前から出てきていたが、そういった関係人口や関わりの薄い人がこの序文を読んで自分事化できるのだろうか。

仲田委員

高尚な文章だと感じるかもしれない。いかにも京都人だなと思われるのではないだろうか。

三川委員

そう感じるということは、0. 1 市民を排他してしまうことになってしまうのだろうか。

仲田委員

三つの段落を端的に言うと、自然への畏敬と感謝は、「いただきます」、自他の生をともに肯定し尊重し合うは、「いいね、ありがとう」と表せるなと思った。伝える時は、このくらい難易度を下げた表現も良いかもしれない。

歴史と文化を介して人間性を恢復するという段落に関しては、端的な表現が思いつかなか

ったが、それは私の日常にはまだないからだと思う。日々の市民の暮らしの中にある言葉が見えてくるとイメージしやすい。

事務局

歴史と文化の段落は、三川委員が話されていたように「ワクワク」がキーワードになるかもしれない。

仲田委員

確かに、京都の街中にある建物の歴史と文化を知るとワクワクするが、知らないワクワクしないので、そのワクワクを回復させたいという捉え方もできる。美しいものもその背景を知ると、より美しく見えることもある。

事務局

建物以外にも、コミュニティやイベント、行事などで、序文に書かれていることはもしかしたらこういうことかもしれないというような具体的な風景を考えることができる可能性がある。

大井委員

具体的なエピソードや風景と言われると難しいが、市外から京都に来た知人は、鴨川からの距離で住む場所を決めていると言っていた。それも一人だけではなく、何人もいたので興味深かった。

仲田委員

序文と関連するエピソードが出てこないことも1つの解なのかもしれない。

事務局

序文を読んで、日々の生活の中でこういうことを言っているのかもしれないなとイメージできる部分はあったらどうか。

大井委員

共同体の段落にある、「地縁や職業のみならず」の部分はイメージできた。区役所に勤務していて、いろいろな団体の方と関わったり、祭りなどの行事があったりするから身近に感じる。

三川委員

歴史の段落と共同体の段落はイメージしやすいが、自然の段落は少し難しく感じた。人間性の回復と自他の生を尊重することは能動的な印象を受けるが、自然の段落は、これを受けてどうすればいいのかイメージしづらいからかもしれない。

仲田委員

自然の段落は伝統産業の文脈で考えると見え方が変わってくるのではないだろうか。漆塗りや西陣織は自然由来の素材を使っているのでイメージしやすいが、私も含め無形サービスの仕事をしていると、自然という資本のおかげで商売しているという感覚を持ちづらいのかもしれない。京料理も自然から食材をいただいているが、畑から収穫するというプロセスがなくなってくると、自然資本のおかげで成り立っていることを実感しづらくなってしまい、序文を読んでもイメージしづらいということにつながるのではないか。こういった話をするイメージできるが、実感が湧きにくいということが現在地を表している。

イメージできないのは、それが便利だからだと思う。魚は切り身で売っていた方が便利だが、それだと魚が自然資本だと捉えられないように、便利を享受しつつも、自然に生かされ自然を生きていることを再認識する必要があるということが京都のメッセージだとするとしっくりくるような気がする。

三川委員

今の文脈をうまく入れられると広く市民に読み解いてもらえると思う。

仲田委員

読む人の立場や背景によって、序文の捉え方が変わってくる。特に冒頭の6行は、どの都市においても重要なことなので、他の都市に名前を置き換えても情景が浮かぶ。京都という都市名を入れることによって見える情景の違いは、京都のことをどのくらい知っているのかに委ねられている。それを表現するのが、冒頭の6行に続く3つの段落だと思う。

安野委員

仲田委員の御指摘はそのとおりだと思って聞いていた。冒頭の6行は、東京に置き換えても違和感はないが、その後に続く文章は京都の独自性が表れていると思う。ただ、自然の段落は他の段落に比べて、京都ならではの印象は薄れる。京都においては、借景の文化もあるように、建築物が周辺の山々と密に結合していると思うので、そういった部分が前面に出てくると他とは違うと思わせられるのではないだろうか。共同体の段落についても、東京には当てはまらないかもしれないが、他の都市に置き換えても通じる部分があると思う。

三川委員

共同体の段落において、「愛おしくてたまらない」という、ほかとは異なる表現が突然使われているのが特徴的だった。

安野委員

私も同じく印象に残った。個人的には、この表現は使わなくても良いのではと思った。現在の京都市を織り成してきたのは、愛おしくてたまらない人間関係だけではなく、憎しみ合っているとまではいかないにしても、そういった人間関係も含まれているはずである。生身

という部分についても、生身だけでなく、文通や歌のやりとりもあったと思う。

三川委員

確かに、そこに京都らしさがあるように思う。少し前にある、複雑で、繊細でという部分に凝縮されていると思うので、この部分をもう少し要素分解して織り交ぜると、京都ならではの人間関係を表現できるのではないだろうか。

安野委員

愛に関する言及を否定はしないが、愛憎の両方に言及した方が良いかもしれない。

三川委員

みんなで読み込むと様々な発見があり、解像度が高まって面白い。

事務局

仲田委員は、地域企業の方や若い世代のコミュニティと関わる中で、今を生きづらく感じ、新しい未来を描いている方々が多くいると思うが、この序文の中でそういった方々と共感できそうな部分はあると思われるか。

仲田委員

歴史ある業界の中で新たなことをする勇氣はあると思うが、同時に出る杭は打たれることもある。本物として認められると逆輸入的に受け入れられるようになると思う。

事務局

序文の価値観が浸透していった場合、そういった方々が新しいことをする際の後押しになるのだろうか。

仲田委員

そういった意味では、希望の未来にワクワクするというよりは、京都らしい雰囲気を感じているように感じた。序文に出てくるキーワードは、老舗企業が大事にされている価値観に近いと思う。この序文が後押しにならないわけではないが、新しいものをつくることが必ずしも良いとは言っていないのではないだろうか。

三川委員

確かに、継承していこうということは感じ取れるが、新しいこともどんどんやっていこうというニュアンスはあまり読み取れない。

仲田委員

革命を起こそうというような文章ではないので、ほっとするような感覚もある。それでも、

ゆっくりと時間をかけながら変わっていくような気配は感じる。「長期的な共栄」という言葉の中に、温故知新や不易流行のような意味が含まれているという解釈もできる。

三川委員

そこをもう少し強調してもいいかもしれない。

仲田委員

来る四半世紀の間に様々な変化が起こると書かれているので、その中で時代にどのように応じていくかというニュアンスが含まれる方が良いと思う。

三川委員

先ほども言及した複雑さや繊細さの部分をもう少し強調すると、変化するために様々なことが起こるが、それも共同体の中で乗り越えていこうということを示せると思う。最後から3行目に、「あたたかな息遣い」とあるが、この部分もあたたかいものばかりではないと思うので、尖っても良いのではないだろうか。

仲田委員

三川委員がおっしゃる部分も自然の段落で感じる違和感も、本当にそうなのかと疑問に思うから生じるのかもしれない。

話は変わるが、先斗町のある女将さんが、最近の若い子はペットボトルでお茶を飲んでいと思うけど、ペットボトルで飲んでも、お茶を飲むということに変わりはないが、急須で淹れた方がおいしいのという話をされていた。急須で淹れて飲むことは不便だと思っているが、不便ではなく、豊かさを感じるための一工夫だと捉えることもできる。

先日、学生と環境問題をアートで解決できるのかという話をした時に、とは言ってもエアコンを使った方が快適だと言っていたのが印象的だった。見方を変えて、暑い夏でもうちわで涼をとることがかっこいいと思うようになれば、エアコンは使わなくなるかもしれないという考え方でいくと、便利だから自然と離れるのではなく、素敵だから自然に近づいていくという転換を起こせるのではないだろうか。

三川委員

改めて読むと、全体的にきれいに収まりすぎているなと思った。1200年以上の歴史を次の1200年に継承していくには、時代に応じて緩やかに変化していくことが必要で、変化する中で犠牲にしなければいけないことも出てくるので、愛おしさだけではなく、時にはしんどい議論もやっていこうということ表現したい。

Bチーム グループ討議

- ・大竹 莉瑚 委員
- ・池坊 専宗 委員
- ・田口 成人 委員
- ・都地 耕喜 委員
- ・杉田 真理子 委員

都地委員

この序文は京都市に住んでいる方に対する説明みたいなものなので、抽象的であり、曖昧さが大きいというところはある。京都の言語化できない暗黙知の良さがこの文章からは伝わってくるものがあり、暗黙知は言語化ができないから「暗黙知」と呼ばれるが、その中で大切にしたいことや、何を期待しているのかについて、それぞれ異なった観点から希望や期待を感じた。

事務局

抽象的に書かれているので、「ふーん」で終わる可能性もある。これまでもいろいろなイベントに参加してきたが、そもそも市民は長期ビジョンを知らない。特設サイトで意見が集まり、それなりに周知ができたかもしれないが、実際に長期ビジョンが完成したときに、それを手に取ってもらうことはさらに大変である。長期ビジョンを浸透させていく1つの仮説として、物語的に、個々が何か自分のエピソードを持っていると、それを通じて長期ビジョンの存在が広がっていくのではないかと考えている。

都地委員

序文は全体的に京都が持っている、心地良さやものの良さが書かれていると感じており、個人的に人との関係性は重要であると考えているため、無駄な人は一人もいないことや、つながりがある故に、肯定できる心地良さや人の良さを感じる。人によっては、京都の自然や文化が心地良さにつながっているのではないかと。市民に聞いていく中で、あなたにとっての京都の心地良さというところに触れることで、それが何なのかということ、文章を深く読まなくても考えることはできるのではないかと。

事務局

「あなたにとって心地良さとは何ですか」という問いかけをした場合に、序文にその答えに関するものが載っていたりするのかな。

都地委員

問いかけられた人の言語化できる部分は形式知として出てくると思うが、なんとなくの暗黙知の部分は序文のどこかに当てはまるのではないかと。

大竹委員

京都は、ただ生活しているだけでは心地良いまちではないと思う。大学進学で京都を訪れ、普通に大学生として過ごしていたときは、交通の問題やオーバーツーリズムといった不便さに目がいきがちであった。しかし、休学をきっかけに町のあちこちで関係ができ始めると、居心地の良さを感じるようになった。現在では複数のコミュニティに所属し、自分の破片が町のいろいろな場所に存在するような感覚がある。この感覚が心地良さにつながっているが、単にここで居住し生活しているだけではこのようなつながりは生まれないと感じる。この序文に惹かれる自分がある一方で、普通に学生をしていただけた当時の振り返ると、町のビジョンと一般市民の生活にはギャップがあると感じる。それでも、ビジョンは必ずしも現実には寄り添う必要はなく、むしろギャップがあるのであれば、その間を少しずつ埋めていくことを考えれば良いと思う。そもそも、このビジョンは普通の生活を送る市民や学生に読んでもらいたいのだろうか。今さらながら、このビジョンをどうしたいのかという点で、共創チーム全体として共通認識を持つことができていないように感じる。市民にとって大事にされる指標にしたいのか、それとも行政が制度設計を進めるための指針にしたいのか。このビジョンの立ち位置を明確にすることが、その評価や活用の仕方にも影響を与えるのではないかと考える。

都地委員

「まちづくり」という動詞がある中で、思想・価値観というのは難しいと思う。

田口委員

文章の中に、多くの文脈が隠れていると感じた。例えば、歴史と文化の段落と自然の段落は、共同体の段落とは異なる印象を受けた。共同体の段落は感覚的なものであり、歴史と文化の段落と自然の段落はロジックがあると感じた。そのような意味で、歴史と文化の段落と自然の段落はわかりやすかった。例えば、「人間を自然から切り離し客体化してきた」は科学などを前提して、それを突き詰めたが故に不具合が出ているというようなことが反映されている印象を受けた。

一方、そのような議論をある程度している未来共創チーム委員などは、自然と入ってくる話かもしれないが、全くそのような話をしていない市民からすると、これを受け止めることができるのかというところは少し不安である。個人的な印象として、共同体の段落はケアのことを反映されたのではないかと予想した。以前、未来共創チーム会議で「愛」について話があったが、「愛」の文脈を感じた。

また、歴史と文化の段落と自然の段落の議論は非常に関連するものとして、高齢の方が多くいる自治体などは序文に書かれているような感覚を持っているのではないかとと思う。しかし、同じような感覚をマンション住民が持つことが出来るかといえば難しい。しかし、この序文を読んだときに、すべての人が共感や真意を読み取ることはできないと思うが、それで良いと思う。

都地委員

全体を通すと、それぞれの目線とそれぞれの立場で共感できるところは異なると思う。その中でも、私が感じる良さも異なり、改めて序文をみて、すべてを理解しなくても良いと思い始めた。それぞれの立場で共感できる部分から入ることで、京都をより知ることにつながれば良いのではないかな。

田口委員

例えば、景観づくりのような、何か価値があるとは思いますが、お金にならない活動はボランティアが基本となり、継続していくことが難しく、そうしたものは他にも多くあると思う。そのようなものをしっかりと位置付けて、価値があるということを示していくという点では、時間という縦軸と、自然や共同体という横軸で広がっていて、どこかには引っかけられるような気がする。

大竹委員

「有名・無名を問わない無数の先人たちの献身」というフレーズがあるが、残されたものは美しいもので、偉人の存在は後世にも語り継がれていく。しかし、実際の社会では名も無く亡くなった人々の方が多い。そして、名も無く亡くなった人々や消えていったもののおかげで、今の世の中がある。歴史の中で京都の文化の話をする際に参照されるのは、ここでいう「有名な先人」に依ることが多い。しかしそれらが残ったのは、結果論にすぎない。これからは歴史に残るような何かを生み出していくには、様々な因果の中に存在した、名も無きものや見過ごされているものの重要性を認識し、取りこぼされないようにするべきだと思う。そのようなことを感じられるので、この一文が気に入っている。

また、「非合理・非効率と評され得る様々な人間的つながり」という点についても、これまで注目されてこなかった領域に光を当てているという点が良いと思った。抽象的な部分と具体的な部分が行き来するため難解ではあるが、「個であると同時に全体の一部である」という感覚がこの序文からは非常に伝わってきた。

事務局

大竹委員は「らくさいっこ」の活動をSNSで積極的に発信しているが、どのような目的で発信しているのか。

大竹委員

発信の目的を説明するのは難しいが、この活動をどう捉えてるのか、という点でいうと、人生のなかの味わいのものだと思っている。「働く」がお金を稼ぐ手段になりがちところや、目的が定められているかのように思えてしまう大学生活の中にはない、「じゃない」繋がりを欲しているのではないかな。私は住居を移して、その地域で活動しているものの、その人になったわけではない。かといって外からまちに参与しているわけでもない。どちらの存在でもないからこそ、どちらも行き来できる感覚がある。そのような私たちが、まちの

中で何ができるかをずっと考え続けている。自分たち自身を、町の中の「じゃない存在」と捉えていて、このどっちもつかなさが私たちが活動する意義だとも思っている。私たちが目的意識をもって活動していないのは、このじやなさとか、どっちもつかなさがまさに必要であり、だからこそできることがあると感じているからである。

事務局

知ってもらった人に何か行動を起こしてほしいものではなくて、知ることでその町に住んでいて良かったと思ってもらえるものではないかと思う。

大竹委員

そのような意味でいうと、知ってもらうための発信ではない。フォロワーを増やそうとも思わないし、メディアに出たいとも思わない。記録であり、あったことの積み重ねとしての発信である。

池坊委員

長期ビジョンは全て理解してもらう必要はないのではないか。日本の国づくりも、日本国憲法が戦後制定され、憲法中心に法律や規則などが定められてきた。憲法は多義的で余白があり、約100条あるが、それを全て知っている人はいないと思う。全て知っている人はいないが、憲法13条の前文に、「すべて国民は、個人として尊重される」という一文があり、戦後の国づくりが大きく変わり、日本全体が個人を中心として、そして個として尊重されるということを表している。全ての個人の言うことを聞くことはできないが、同調を取りながら、国づくりや行政を進めていこうとなったと思う。時代ごとに、個人や国民という解釈は変わっていくが、そのような意味では、序文の冒頭の6行が市民と長期ビジョンをつなぐ上で大事であると考ええる。

歴史や文化の蓄積を通して、人間性を回復するという部分について、現代や今までの成長に対するアンチテーゼでもあり、京都というまちが世界中や国内で比較したときに、京都は独自のポジションであることを示しており、歴史や文化を通して、あらゆる人が、どのようなバックグラウンドで、どのような環境にいる人でも、人間性や自分が自分であることを再び発見したり、回復できるということの架け橋になり得るのではないかと思う。この具体的な説明が本文に書かれると思うが、これらは少し文章が難しいと思う。「人間性を回復していく」「互いの命を尊重する」とはどういうことなのかということ、私たちがしてきたように、市民がローカルな枠組みで議論し合うことで、それぞれの理解や解釈が重なりあっていくのではないか。

杉田委員

私は序文を改めてみて、非常に詩的で、ポエムに近く、読む人によって、また読むたびに解釈が変わるとも思い、そのような余白がある部分が良いと感じた。なので、特定の箇所への違和感はない。

審議会で出た意見として、この序文は現在、日本語で提示されているが、京都に関わる人は日本人だけではないという意見に付随し、この序文が英語になる可能性について議論があった。序文だけでも英語で発信できるように意図をもって書かれているとの話であり、私個人としては、その他言語に翻訳をしていただき、どのような解釈が生まれてくるのかや、どのように京都の関係人口が広がっていくかというワクワク感を持った。現在、日本語で、日本をネイティブとする人の中で議論されているが、異なった言語やネイティブではない方が読んだときの想像力も持ちながら序文を読み返すと新たな発見があるのではないかと思う。

都地委員

私は、「省みる」という言葉が印象深い。今まで人間と自然を切り離してきたことをまずは受け入れ、受け入れた後に方針を転換するということを明記するものは、なかなかない。例えば、企業等でも「省みる」という言葉を使用するときは、粗相を起こしたときであるが、業績が悪化したときであっても、なかなか「省みる」という風にはならないと思う。受け入れられるべきところは受け入れ、それこそ、「有名・無名を問わない無数の先人たち」の功績はあるものの、逆に自然と人間を切り離してきたという事実を目を向ける点は、意味のあることだと思う。過去を省みた上でどういった未来を作っていきたいかというところが記載されており、私は自然の段落が好きである。

事務局

「省みる」について、都地委員の実体験を通して、京都らしいと感じる体験はあるか。

都地委員

「省みる」体験は長い歴史があるからこそできることである。新しく生まれたものについて省みたとしても短期間であり、ちょっとしたことしか省みることができないが、「省みる」という行動は、相対比較するものがあるが故なので、「省みる」という行動は京都だからこそできることだと思う。

事務局

序文は3つの思想・価値観に分かれているが、これまでの皆さんの発言で「自然」に関するものの発言が少なかった。序文を改めてみて、その点について、思うところはあるか。

大竹委員

「自然」に関心がなかったというより、個人的には、京都の生活の中で自然があることがあまりにも当たり前であり、日常で享受できる物すぎて、わざわざ考えなかった、という認識のほうが近い気がする。そのため、改めて自分の中から意見が出てくることがなかった。逆に私がよく話題に出す「コミュニティ」は、私が日々向き合っている部分であり、不足していると感じている部分である。私は鴨川ではなく小畑川によく行くのだが、昨日も打ち合わせに小畑川の川辺をお借りした。当たり前にまちのなかに自然があり、暮らしの延長線状

にそれが存在している感覚。あまりにも自然に存在しているから、地域の方も当たり前に綺麗に使う。川を綺麗にしようという張り紙がわざわざないことも、そこを共有する人々の中でその当たり前が共有されているからなのではないか。

事務局

序文を読んで、この「自然」に関する記載は皆さんの感覚と一致しているか。

都地委員

直接的な「自然」ではなく、人間の文明やエゴを今までの時代は優先してきたが、いわゆる合理主義によって余白というものが減り、ゆとりがない状態で詰め込んでいくから、人間がおかしくなっている。自然は逆にいえば、合理を突き詰めた先ではないのではないかと考えている。

ゆとりの話は、自然の話と繋がっていると思うが、不便益を享受するというか、何でも便利にしすぎてしまうと、そもそもの人間が必要最低限で生活できたような環境を否定することにもつながるのではないか。

大竹委員

序文に記載している「自然」は緑みたいな意味だけではなく、科学的なものや合理的なものに対してのアンチとしての自然であり、感覚的なものを肯定してくれるものではないかと思う。単なる「緑を守りましょう」で「自然」を使っているのではなく、もっと身体に戻るべきではないかという提案や、科学や自然に対するスタンスに疑問を投げかけるような文章であると思う。現在の食や農業は当たり前に自然を享受しているが、そこを気にしないような社会になっているところを、立ち戻ってみるべきではないかという文章であるので、まちと自分の在り方について問いかけている感じがする。

都地委員

「省みる」という言葉に立ち返ったときに、合理を追求した結果、不自然になっているところはあると思う。今までは自然を人間から切り離し、客体化してきた事実や合理化してきた経過があるが、その結果、不自然なものを生み出してしまった。現在、自然から離れている中で、今後どのように自然と人間がもう一度立ち戻ってからバランスをとることが出来るようになるかだと思う。

杉田委員

序文に、自然を客体化してきた歴史を省みるという一文があると思うが、哲学者のスラヴォイ・ジジェクが「自然を守りたいと思うのであれば、自然という概念を捨てろ」というような趣旨の発言をしていた。人間に対するものとして自然があり、切り離されてきたものみみたいな考え方ではない京都らしい自然との向き合い方を私自身も考えることがよくあるが、先ほど、大竹委員が話していた、あまりにも普通すぎるからこそ、意識しないくらいに、客

体化していないということについてはっとさせられた。

また、先ほどの不便益の話もその通りだと思っており、合理化を突き詰めていった先にこういった自然的な考え方があるというのは、本当にその通りだと思う。このようなことを同世代で共有できることは非常にうれしく思う。

文化人類学者のアナ・チンの著書に「マツタケ」というものがある。マツタケは養殖できないが、ある程度人間が伐採をして栄養がなくなった地面に生えてくるとか、人間の介入が入ることで生まれてくるが、介入しすぎても育てられないという、人間がコントロールできないが、人間がいなくてはいけない不思議な関係性が書かれており、まさに、都地委員と大竹委員の話に関係するものだと思って非常に興味深く聞いていた。

事務局

大竹委員は、現在の考えを京都にくる前からもっていたのか、それとも京都での活動を経てそのように考えるようになったのか。

大竹委員

自分の中にずっとあった考えだと思う。ただ、このまま進んでいったら無理だと感じ、休学を選んだ。世では「生き方は無数にある」と言われているが、実際には5個くらいしかないように見えてしまう。何も考えずに就職活動をすれば、ある程度はまることはできるが、それは自分にとって心地良いものではないとずっと感じていた。そう思うてしまう自分は「おかしいのではないか」と考えていた時期もあった。自分の中で「生きるうえで心地良い価値基準」がわからず、それを手に入れるために周りに合わせようと自分を矯正してきたように思う。今は、自分がやりたいと思えることに向き合えるようになり、学生という免罪符を使える最後のチャンスだと考え休学という選択を選ぶこともできた。普段の生活では、居心地の悪さを感じながらも、「周りがやっているから自分も合わせなければならない」と目をそむけてしまう。一度立ち止まるという選択ができたのは、自分にとって非常に良かった。現在は、自分の感覚を肯定できるようになり、周囲にも自分と似た感覚を持つ人が意外と多くいることに気づくことができた。

都地委員

私も京都に住んで、このような会議に参加させていただき、昔のものごとと現在を相対比較する機会が増えた。例えば、平安京に遷都してからこのまちは消滅していないことなど、このまちをより知ることが出来ている。人間は、大阪や東京も埋め立てとかしながら拡大しており、当時とは技術面で大きな違いはあるが、埋め立て地などは災害があったときの脆さは間違いなくある。

一方、昔の人は、自然や開けた土地の配置などの情報をもとに、この京都に都を作るという考えに至ったわけで、その判断がこのように1000年も成り立つような都市になっている。近現代の人間はできることが増えたからといって、安全性の責任をもてないようなものを作ってしまう。それは人間独自のエゴによって成されたものであり、人間が自然に対抗で

きないことや、自然と共同した昔の人は賢かったことを感じた。

田口委員

言葉遊びになってしまうかもしれないが、合理性という言葉でいうと、昔の人の方が合理的だったのかもしれない。広い主体で捉えたときの微生物も含めた合理性という点でいえば、合理性はあったほうが良いという話もできると思う。

都地委員

面白い点は、人間はできることを発見してしまうと、自分が神になったような気になってしまう。いろいろなことをやろうとしたときに、自然との共同が一番盤石であるところと言えることであり、自然という枠組みの中から人間を逸脱させるべきではないと思う。

杉田委員

昨日、「扇状地の都」の本の紹介をポスターで見た際に、そこに「京都が京都たらしめられたのは、山・川・土のおかげ」と書かれており、先ほどの話を聞いて思い出したところである。

池坊委員

移住者や京都に魅力を感じて関わる人などは、人と自然との距離感や長い歴史の中でルーツを自分の中で見つけ直すプロセスも関係してくるのではないかなと思う。自然自体は東京でも北海道にもあり、京都にもいろいろな自然があると思うが、京都は人々の暮らしや食、伝統の継承に織り込まれている。織物も現在は川で布をさらすみたいなことはないが、場所を変えたり形を変えたり息づいている。今でも焼物屋では雨水を混ぜながら、土をこねていくとか、近畿圏の他の都市から、京都の水は軟らかいということで、京都の水に惚れ込んで京都に店を開く人もいる。いろいろな自然との関わり方があるが、手仕事や井戸水の暮らしぶりなどにつながっており、自然が生活に織り込まれているところが、京都らしいと思う。

田口委員

1つ、皆さんの意見を聞きたいところがあり、共同体の段落で、先ほど「ケア」の話が入っているのではないかと私は感じたことを話したが、「生身の人間関係が愛おしい」や「日常が温かい」の部分は感覚的な要素があり、感情的なものが人間関係に重要とも読み取れる。例えば、私が地域の集まりに参加していときに、40歳ぐらいのサラリーマンが多く参加していたかと言えばそうではないが、それは愛情がないのかといえば、そうではないと思う。そうしたときに、それらを紐づけるのは危険ではないかと感じ、関わりの中で結果として愛情や温かみが出てくるという話ではなかったかということを、序文を読んだときに思ったがいかがか。

大竹委員

鶏と卵の問題に似たものではないかと思う。

田口委員

これに関していえば、そのような集まりに参加できない人が増えている世の中において、それをダメージとして負っている人は多くいると思うときに、それができないことが「愛おしみが足りない」という意味合いに取られかねないのではないかと。

大竹委員

それは個人の責任というよりは、社会がそのような流れになっているということであり、労働する世代の20歳後半から50歳ぐらいの人は、慈しむ余裕がなく、会社以外のつながりや時間をとる余裕がないものになってしまっているから、それは、本当に仕方がないのかという問題提起であり、選べる状態でそれを選んでいることと、生きるためにそれをするしかないとは違う話であり、経済資本は大事ではあると思うが、関係資本も大事である。